

国語教師・布川とアクティブ・ラーニングの視点

1982 年 6 月、母校・川崎高校で教育実習をしました。そのとき、出会った A 先生。私の指導担当ではありませんでしたが、教養がオーラとなって後光が射しているような、強烈な存在感のあった A 先生と出会いました。A 先生に私は、自分の不勉強・無教養を嘆き、A 先生と自分との圧倒的な差から、「今から勉強しても間に合わないような気がします」と泣きを入れたところ、A 先生は私に、「もう文学青年の時代は終わったんだよ」と言いました。

私は意味がわかりませんでした、「どういうことですか?」と聞き返しはしませんでした。聞き返したところで、私には理解できない奥深い意味があるように思いました。「その意味は、私が実際に国語教師になって、猛烈に勉強して、自分で見つけるしかない。」そんなふうに思いました。とにかく、その言葉は、不勉強・無教養な私に対する「慰めの言葉」ではなく、何か奥深い意味があるに違いないと思い込んだ私は、その言葉とともに教師人生を歩むこととなります。

猛烈に教員採用試験の勉強をし、大量採用の時代とは言え、奇跡的に合格しました。常々、皆さんに「大学合格に特化した高校生活を送ってはいけません。あらゆる角度から自分を鍛え、なおかつ第一志望にチャレンジしてください。」とお願いしている当の私は、勉強も部活動も満足にせずに、教員採用試験合格に特化して勉強し、やってはいけない方法で、なっていない職業に就いてしまったわけです。

実際に国語教師になって驚きました。1 年生の国語の教科書が難しくて難しく、当時は国語 I という科目なのですが、とにかく難しい。指導書というのがあって、まあ言ってみれば教師用の教科書ガイドなわけですが、これをとにかく理解するわけです。ところがここで困ったことが起きます。言葉の意味や作品の背景は指導書に書いてあるとおりで結構ですが、本文の解釈というのが納得できない。そもそも、テストで問うことができるのは読解であって、解釈ではない。そのとき A 先生のことを思い出しました。A 先生は、作品についての授業がひととおり終わると、よくその作品についての A 先生の評論を配っていました。そういえば、A 先生、「指導書はつまらない」と言っていました。だから、指導書どおりの解釈を良しとせず、「これはあくまでも私の考え方だよ。」と断り、ご自分の書いた評論を配っていたのでしょ。

これを私もやるようになりました。読んで来なかった私は、書くことで鍛えられました。そして、私が推進する「アクティブ・ラーニングの視点」では、「書く」ことが重視されます。

私も評論を書くようになりましたが、ひととおりの授業が終わらねば配れま

せん。では、授業では何をやるかという、「読解」です。「な〜んだ。」と期待外れだったかも知れませんが、国語の授業で一般的に行われている読解と私の「読解」はちょっと違います。

「読解」とは、「文章に書かれたとおりに事実を読み取る」ことです。従って、答は一つです。そして、その上に、「解釈」の問いを与えました。解釈は自由です。ただ、解釈の中に事実誤認があってははいけません。そこは徹底的に指摘します。その違いがわからない生徒が多く、「解釈は自由だなんて言うておいて、嘘つきだ。」などと言いますが、譲るわけにはいきません。「解釈は自由だよ。でも、事実認定は自由じゃない。事実誤認はゆるされない。」(なんだか、私の生徒指導の方針と重なってきました。)

さて、この「読解」にこだわる授業法が、それほど国語の世界では当たり前ではなく、この読解授業を続けていくうちに、ふとA先生の「もう文学青年の時代は終わったんだよ」という言葉が思い出されました。「そうか。俺の授業は、『文章に書かれたとおりに事実を読み取る』授業、文学性のかけらもない。でも、国語の基本は、『文章に書かれたとおりに事実を読み取る』ことに違いない。これが文学青年は苦手なんだな。これからは、『俺の時代』なんだな。」と、A先生の言葉を「解釈」したわけです。

そして、アクティブ・ラーニングの視点です。「読解」という視点で、「アクティブ・ラーニングの視点」を考えると非常にわかりやすい。

- ① (各教科の)教科書等(文章及び図表等資料)を読解する(教科書等に書かれたとおりに事実を読み取る)。
- ② 読み取った事実を踏まえて、正解のない問いを考察し、文章化する。(事実誤認に誤りがあれば不正解となります。)
- ③ その考察をグループワーク等でぶつけ合う。
- ④ グループワーク等で深まった考察を文章化する。

グループワークに積極的に取り組まないタイプの高校生であった私が、こんなにも「アクティブ・ラーニングの視点」に惹かれるのは、「文章に書かれたとおりに事実を読み取る」と「文章を書く」ことにあったのだと思います。アクティブ・ラーニングの視点は、偶然にも、不勉強という私の人生のハンデを克服するための唯一の視点だったような気がします。アクティブ・ラーニングの視点の正しさは、私の人生が証明しています。皆さん、アクティブにラーニングしてください。

(京都大学教授・溝上先生のサイトに本校若井千明先生が書いた学校紹介、潮来友梨先生(英)の授業実践、黒田順子先生(家庭)の授業実践、溝上先生のコメント、そして、私の一言が載っています。ご覧ください。)

(そう言えば、以前、溝上先生の前で、私の人生を「一人アクティブ・ラーニング」と言ったことがあります。「小さな巨人」ならぬ「大きな小人」といったところですよ。(笑))

(2022年度から適用される学習指導要領における国語では、「国語表現」が4単位となり、さらに「論理国語(4単位)」が新設されます。時代がやっと私に追いついて来ました。(笑))